

「今昔の感」の今昔

大津 隆文

一月四日、日経新聞の一面は「日鉄に買収中止命令」との大見出し。日本製鉄のUSスチール買収計画にバイデン大統領が「安保上の懸念」から中止命令を出したとの記事だった。それを見て「今昔の感」と題するエッセイを思い出した。

今から約四十年前ニューヨークの「日本倶楽部だより」に掲載された一文。筆者は梅根英二氏（米国新日本製鐵社長）で、今も印象に残る内容は次の通り。

「ほぼ三十年前私は米国の製鉄会社の研究所に一年身を置いた。その所長がある日お宅に招いてくれ、自分の車（ベンツ）を示し『これは素晴らしい車だよ。自動車王国のアメリカだが外国製でも良い車なら喜んで買ってくれる。君の国は小さな島国に一億人も住んでいて、これという天然資源もない。僕は君達がどうやって生きていくか気になっている。いいかね、君の国でもまず良い鉄を作ることだ。次にその良い鉄を使って良い車を造ることだね』と言った。

自分は応えた。『お言葉には感謝しますが、米国に比べ鉄鋼の生産量も技術レベルも余りにも大きく離れています。まして日米の自動車産業は大人と赤ん坊ほどの差があり、どんなに頑張っても到底無理と思います』」

梅根氏は記す。「今や鉄鋼の生産量、さらに品質・技術も米国を上回り、自動車産業も輸出の自主規制を懇請されるほど強くなっている。だが私達は「今昔の感」に浸っている余裕があるのか（今日の米国は明日の日本）」

それから四十年、今回の買収提案にまで至ったが、バイデン大統領は米国を代表する鉄鋼会社は、米国人によって所有・運営されるべきとする。四日の日経夕刊のトップは「USスチール再建困難に」だ。「鉄は国家なり」で、どの国でも社会（政治）の情念は経済の論理を押し潰す。

エッセイで印象深かったのは、アメリカ人の善意、寛大さだ。それは圧倒的に優位に立っているが故の余裕だったのだろうか。トランプ次期大統領のMAGAも、古き良きアメリカの美風を復活させて欲しいものだ。